



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3590号 2017.4.8 発行

自分の葬儀光景が目浮かぶ…うつは心のがん、自身や大槻ケンヂらの壮絶「うつヌケ」体験を大阪のギャグ漫画家が描く



産経新聞 2017年4月7日
インタビューには大槻ケンヂさんら著名人も登場。それぞれのうつ病との向き合い方が掲載されている。(C) 田中圭一

原因不明の恐怖や不安に常にさいなまれ、生きるのが辛い。そんなうつ状態から回復した自身の体験や、経験者へのインタビューをまとめた大阪府枚方市出身の漫画家、田中圭一さん（54）のドキュメンタリー漫画『うつヌケ うつトンネルを抜けた人たち』（KADOKAWA）が注目されている。ミュージシャンの大槻ケンヂさんや作家の宮内悠介さんらうつ経験者17人の実体験をもとに、「うつは心のガンだ」と警鐘を鳴らす。（木ノ下めぐみ）

正体不明の恐ろしい幽霊、実は性質がわかっている妖怪だった

《2012年5月4日（金） この日はボク 田中圭一の命日になるはずでした》

花に囲まれた葬儀場の祭壇に自身の遺影が並ぶ。うつの症状に苦しんでいたさなか、幾度となく想像した田中さん自身の葬儀の光景。「辛いと悲鳴を上げる体に『50歳の誕生日に死んであげるからそれまでは頑張ってくれ』と脳が約束した」と田中さんはいう。追い詰められていく田中さん自身の体験を語るページからはうつ病の恐ろしさが伝わってくる。

大学在学中に漫画家としてデビューし、サラリーマンと漫画家という二足のわらじを履く田中さん。手塚治虫氏ら大御所漫画家の画風で、ちょっと不謹慎なネタギャグを繰り出す作品が人気だが、今作はギャグテイストを盛り込まない初のシリアス路線で、うつ病克服というテーマに挑戦した。

田中さんがうつの症状に苦しむようになったのは平成17年ごろ。畑違いの分野への転職を機に、仕事内容や職場の雰囲気になじめない自分への嫌悪感が引き金になった。症状を抑える投薬量が増えていく不安から無断で薬をやめ、病院も変え、さらに症状が悪化するという悪循環に陥り、うつを脱するのに約10年の歳月を要した。



そんな田中さんがうつから抜けるきっかけとなったのは、自らもうつを克服した精神科



そんな田中さんがうつから抜けるきっかけとなったのは、自らもうつを克服した精神科

医、宮島賢也さんの著書だった。さらに、気温差に連動して自身の症状に浮き沈みがあることにも気づき、自分のなかで折り合いをつけられるようになった。「正体不明の恐ろしい幽霊が実は性質がわかっている妖怪だった。そんな気づきだった」という。

気温差と連動？ うつは一生もの、上手につきあう方法模索して

「自分はラッキーだっただけ。もしあの1冊に出会っていなければまだうつのトンネルをさまよっていたかもしれない」。それでも医師には「うつは一生もの」と言われ、寛解したといっても気温差の激しい季節になると症状がぶり返すことは今もある。「気持ちの浮き沈みが誰にでもあるようにうつにも波がある。でも付き合っていく方法はある」と思うようになった。

1冊の本に救われた経験から「自分の経験を描くことで誰かにとっての1冊になれば」と自身の経験をマンガ化したいとネット上で発信すると、後の担当となる編集者から打てば響くように反応があり、出版の必要性を強く感じた。

うつは誰でもかかりうるものだということを知ってもらおうと、自身の経験のみならず、著名人や編集者、OL、教員など幅広い人の事例を盛り込んだインタビュー集に。仕事上の過度な期待や大切な人との死別、養育環境に起因するトラウマなど、うつの引き金は千差万別で、回復の過程も人それぞれだった。「どれか1つでも読んだ人に当てはまるころがあれば」と田中さんは期待を込める

「頑張り」は禁物 うつは“怠け病”に非ず、見えてきた正体

田中さんには苦い思い出がある。自身がうつ病になる以前の平成初期、職場にいたうつ病に苦しむ部下に「頑張り」と言ってしまったのだ。当時はまだうつ病は広く浸透しておらず、「うつは怠け病だと誤解していた。自分になってみるまで辛さをわからなかった」と振り返る。

厚生労働省の患者調査によると、平成8年には約43万人だったうつ病患者数は、20年に約104万人と2倍以上に。その後も高止まり状態が続き、26年には約112万人に増えている。医療機関を未受診の人も含めればさらに数字は膨らむ。

「うつの症状はグラデーションのようになっていて、グレーゾーンの人が多い。そんな人に作品を通じて注意を促したい」。自分のような辛い思いをする人を少しでも減らしたいという思いがにじむ。

うつを広くわかりやすく伝えようと、作中ではうつ病患者を取り巻く不安をぶよぶよとした物体として描いたり、うつヌケた世界をカラーで表現するなど可視化に努めた。淡いピンク色を基調とした優しいデザインも「うつの人もそうでない人も手に取りやすいように」という配慮が込められている。

1月中旬の発売から1カ月半で10万部（電子版含む）を売り上げ、ネット書店「アマゾン」では発売から7週連続で総合書籍の部門で上位3位に入り続けるベストセラー作品となった。

《うつは心のガンだ。うつはほおっておくと死に至る病です》

作中に登場するうつを克服した脚本家の一色伸幸さんの言葉が印象的だ。万人に効く特効薬は今なお見つからないが、「うつヌケ経験者へのインタビューからうつの正体が見えてきた」と田中さん。ギャグマンガ家が描いた渾身のシリアス作品は、自分の気持ちとどう向き合うべきなのか考えさせられる1冊だった。

知的障害者昇進の人材活用戦略 やる気・能力アップ効果 企業にもメリット

産経新聞 2017年4月7日

企業の障害者雇用が増える中、知的なハンディがあっても、経験を積み職場で昇進するなど中心的な役割を担う人が出てきた。責任ある仕事を任されることで、やる気や能力向上にもつながっている。福祉的な意味合いだけでなく、さまざまな人材の活用で総合力を上げる企業のダイバーシティ（多様性）戦略としても注目されている。

業務に支障なし

知的、精神障害者が多く働く東京都の特例子会社「第一生命チャレンジド」。社員のやる気を高めようと、平成23年に職位制度を創設、22人のトレーナーとその上位の3人のリーダーがいる。

知的障害がある角田怜さん(32)は、昨年4月、書類発送部門のリーダーに昇格した。「仕事を評価してくれたことがうれしい。時間内に終わるようにみんなの仕事にも気を配っている。面倒な仕事も、挑戦して乗り越えていこうという気持ちになった」と角田さん。

同社は社員の7割の159人に知的や精神などの障害があるが、お互いにどんな障害かは知らない。「本体の職場にもいろいろな人がいるが、その幅が広いという捉え方」と菌部俊彦社長。体調が不安定な時はカバーし合う態勢を取っており、業務に支障はないという。

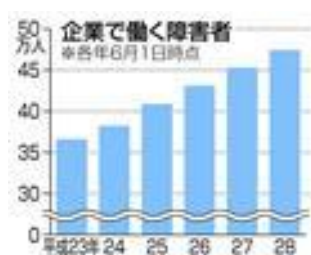


打ち合わせをする第一生命チャレンジドの角田怜さん(右奥)と社員=東京都北区生産性向上



食品トレーメーカーのエフピコ(広島県福山市)の特例子会社「エフピコダックス」(高知県南国市)も知的障害があるリーダーがいる。茨城県八千代町の工場

で働く峯則幸さん(25)は、昨年4月に主任補佐になった。「うまく作業ができない人に声掛けをしたり、地震の時にすぐ避難できるように気をつけたりしている」と役割を説明する。



以前、トレーの選別は機械を使っていたが、違う色のものが交じるといった課題があった。この仕事を知的障害者らに任せるところ、ミスが減り、生産性が向上。グループ全体の障害者雇用率は14.56%、374人の障害者が働く。「他の社員と同じように、昇進や役職手当はキャリア形成に必要」との考え方だ。

働き方見直し

民間企業で働く障害者は年々増え、47万人に上る。だが、基幹業務に関わる例は少なく、法定雇用率(2%)を達成する目的で、障害者向けの仕事をつくるといった例も多い。本業にどう結び付け、能力を高めていけるかが課題となっている。

仕事ができないと決めつける企業の意識改革も必要だ。ヤマト運輸の出資で10年に設立され、全国に店舗があるスワンが運営するベーカリーでは、ハンディキャップのある社員らにレジ打ちを、カフェでは注文取りを任せている。松本行雄社長は「覚えてしまえばこなせることも多い。活躍の余地はもっとあるはず」と話す。

東レ経営研究所の宮原淳二ダイバーシティ&ワークライフバランス推進部長は「知的障害のある社員に仕事の一部を任せ、他の社員がより難度の高い仕事に集中することも可能で、仕事の“棚卸し”や働き方の見直しにもつながる」と指摘している。

高齢者のグループリビング 付かず離れずの快適生活

産経新聞 2017年4月7日

グループリビングえんの森の食卓。居住者、スタッフとその子供たちがお茶を楽しむこともある



血縁関係のない高齢者が一つ屋根の下で暮らすグループリビングと呼ばれる生活の形態が広がっている。プライバシーが高いレベルで保たれ、終(つい)の棲家(すみか)として安心して暮らせるためだ。孤立しがちな高齢者が



楽しい毎日を過ごすための暮らし方として、今後ますます

す注目されそうだ。(櫛田寿宏)

家事から解放

埼玉県新座市にあるグループリビングえんの森。10人の高齢者が、鍵のかかる16畳の居室に1人ずつ暮らし、夕食はリビングルームで一緒に食べるスタイルだ。

布施杏子さん(83)は1年前に膝を痛めて手術を受けたのをきっかけに入居した。「付かず離れずのちょうどいい人間関係が保たれていて、本当に快適。長く家事をしてきましたが、ここではその多くから解放されます。その分、プライベートの時間を充実させることができる」と笑顔を見せる。収納スペースが広く、居室が床暖房になっている点も気に入っているという。

入居時に支払う一時金は300万円で、毎月の家賃や食費などの費用は12万8千円。布施さんは「月々の費用は年金で無理なく払える金額です。これで栄養のバランスの良い食事が食べられ、お風呂の心配もないのですから、本当に安心です」と話した。

門限なし、外泊自由

えんの森がオープンしたのは平成23年。閑静で緑豊かな住宅街で、女性9人、男性1人が暮らす。運営するNPO法人「暮らしネット・えん」代表理事の小島美里さんは、建物の窓から見える美しい風景を軽井沢になぞらえる。「ここは老人ホームではないので、門限はないし、外泊も自由。むやみに人の生活に立ち入らないけれども、必要なときには助け合っています」と説明した。

日本シェアハウス協会によると、グループリビングや高齢者を積極的に受け入れるシェアハウスは形態がさまざまに正確な数は把握できない。ただ、高齢化が進む中で、増加が続いているとみられるという。

価値観さまざま

神奈川県藤沢市のCOCO(ココ)湘南台はそうしたグループリビングの草分けだ。11年に開設され、各地のグループリビングのモデルになっている。

生涯型なので、最期まで住むことができる。入居にあたって保証人は必要ないが、急病などの際は本人の子供や兄弟らに連絡する。

現在は10室に女性9人、男性1人が生活している。年齢は70~90歳。段差のないバリアフリーの2階建ての建物で、車いす1台と介助者が一緒に乗れるエレベーターがある。

2階のキッチン・食堂・リビングルームは約36畳あり、広々とした空間。ソファベッドを備えたゲストルームもあり、来客や介助者が宿泊することが可能だ。

畳15畳分の広さがある居室にはベランダが付いていて、実際よりも広く感じる。よくしつけられていれば、犬や猫などのペットを飼うことも認められている。

開設の立役者で、運営するNPO法人「COCO湘南」の理事長を昨年まで18年間務めた西條節子さん(88)は、開設以来、COCO湘南台に居住している。「戦前生まれの人も戦後生まれの人もいて、価値観もさまざまだが、それぞれが互いに配慮して楽しく暮らしています」と話す。

全員が一堂に会する夕食が終わると、住居者は三々五々、各部屋に戻る。西條さんは毎日、自室で1杯の赤ワインを飲みながら、大好きなビートルズや沖縄音楽などをゆったりと鑑賞。1人での時間を大切にしているという。

大江守之理事長は「自由度の大きい暮らしができるのがグループリビングの魅力。年々健康寿命が伸びる時代にあって、変化に対応できるよう工夫していきたい」と話している。

子どもの貧困解消を目指す「子ども食堂」ブームに欠けた視点

ダイヤモンドオンライン 2017年4月7日

みわよしこ[フリーランス・ライター]

1963年、福岡市長浜生まれ。1990年、東京理科大学大学院修士課程(物理学専攻)修了後、電機メーカー

で半導体デバイスの研究・開発に10年間従事。在職中より執筆活動を開始、2000年より著述業に専念。主な守備範囲はコンピュータ全般。2004年、運動障害が発生（2007年に障害認定）したことから、社会保障・社会福祉に問題意識を向けはじめた。現在は電動車椅子を使用。東京23区西端近く、農園や竹やぶに囲まれた地域で、1匹の高齢猫と暮らす。日常雑記ブログはこちら。

● 生活保護のリアル～私たちの明日は？ みわよしこ

生活保護当事者の増加、不正受給の社会問題化などをきっかけに生活保護制度自体の見直しが本格化している。本連載では、生活保護という制度・その周辺の人々の素顔を紹介しながら、制度そのものの解説。



生活保護と貧困と常に隣り合わせにある人々の「ありのまま」の姿を紹介してゆく。

子どもの貧困解消を目指す「子ども食堂」がブームとなる一方で、現状が大きく改善する気配はない。現在ある「子ども食堂」にはどんな視点が欠けているのだろうか

広がる「子ども食堂」は

子どもの貧困を解決できるのか？

2017年3月20日、三連休の最終日となった春分の日の午後、シンポジウム「子どもの貧困対策

の未来 子ども食堂をこえて」が大阪市で開催された。主催したのは、大阪市生野区を中心に活動する「生野子育て社会化研究会」。直接支援を行うNPOや研究者など、子どもの成育に関わる多彩なメンバーで構成された民間研究会だ。私自身も、本連載で研究会の活動を紹介したことが契機となり、昨年末より研究会の一員として活動している。

「子ども食堂」がブームとなる一方で、子どもの貧困問題が大きく改善する気配はない。子どものいる家庭の生活保護基準は、引き下げの検討や実施が続いている。また教育に関しても、財務省はより一層の削減を求めている。国レベルの予算削減が続き、深刻化していく子どもと親の貧困そのものを解決する力は、現在の「子ども食堂」にはないことを認めざるを得ないだろう。少なくとも「子ども食堂」に加えて、現在の「子ども食堂」を質



量ともに超えるための何かが必要なのは間違いない。

プログラム前半で講演する筆者。「子ども食堂」と「子どもの貧困」報道の、短期間ながら複雑かつダイナミックな歴史を振り返っていると

ころ
そのような問題意識は、多くの人々に何となく共有されていたのだろう。この日の大阪市は、

好天のポカポカ陽気であったにもかかわらず、会場となった大阪教育大学天王寺キャンパスのホールは、多数の参加者で埋め尽くされた。

プログラム前半では、私が露払いとして、子ども食堂に関するメディア報道の動向、米国の民間の取り組み、米国の寄付と助成の仕組みなどを紹介した。続いて後半では、「子ども食堂」活動を実際に行っている4名、研究者3名（社会福祉学・保育学・障害児教育）、報道に携わる私の合計8名によるパネルディスカッションが行われた。

シンポジウム「子どもの貧困対策の未来 子ども食堂をこえて」の事前告知チラシ。筆者自身にとっても、多様な内容・多彩なパネリストとともに「これ

現在、日本の子どもの6人に1人が貧困状況に置かれていると言われており、昨今のメディアや世論の関心が高まり、市民ともに対策が進められつつあります。

2014年夏ごろから、生野区にて子どもの食事を開始し、ニーズに合わせて、一人ひとりに寄り添った支援を行う中で、より有効な支援を進めるために、2016年夏、「生野子育て社会化研究会」を立ち上げました。「調査・研究・実践・評価・モデルづくり・政策提言」を行い、子どもたちや家庭の課題を解決するために活動を始めています。

子ども食堂を通じた活動を発展させ、地域で何ができるのか？
社会に何が必要なのか？
ご関心あるみなさまと一緒に考えていきたいと思えます。
みなさまぜひご参加ください。

2017年
3月20日(月・祝)
14:00-17:00
(13:30開場)

子どもの貧困対策の未来
子ども食堂をこえて

1部:基調講演
みわよしこさん(フリーライター)

2部:パネルディスカッション
進行/加美真史さん(東大)

パネリスト/池谷航介さん(大阪教育大学)、奥野隆一さん(佛教大学)、
隅田耕史さん(フェリス学院)、高橋淳敬さん(ニュースタート関西事務局)、
津守佳代子さん(飯米とパンボン食堂)、徳丸ゆき子さん(OPA)

◆定員:150名(要予約・先着順)
参加にあたってサポートが必要な方は、3月5日までに下記まで事前にお申し出ください。

◆会場:大阪教育大学天王寺キャンパス西館ホール

◆参加費:無料

◆申し込み方法:tabidati@tabidati.jp TEL 06-6754-3011 FAX 06-6754-3013

◆主催:生野子育て社会化研究会

◆共催:国立大学法人大阪教育大学教職教育研究センター、NPO法人出版のなかまの会、
NPO法人フェリスモンテ、NPO法人OPA/大阪子どもの貧困アクショングループ

から」の次の一步を考える貴重な機会になった

本記事では、パネルディスカッションで語られた内容を中心として、子どもの貧困と「子ども食堂」の現在を、多面的に眺め直してみたい。貧困と欠食の中で心身にハンデを背負いながら育つ子どもにも、経済的には不自由のない生活をしているゆえに困難を訴えにくい状況にある子どもにも、それぞれのニーズがある。内容の違いや濃淡があっても、ニーズや困難は「地続き」であるはずだ。

パネルディスカッションで「子ども食堂」活動への取り組みについて話題を提供したのは、隅田耕史氏（NPO法人フェリスモンテ）、高橋淳敏氏（ニュースタート関西事務局）、津守佳代子氏（藍朱〈らんじゅ〉とピンポン食堂）、そしてCPAO・徳丸ゆき子氏だ。といっても、目的、対象、スタイルはそれぞれ大きく異なっている。

4つの「子ども食堂」は運営者もスタイルも様々

まず、最初に注目していただきたいのは、「子ども食堂」を運営する立場から話題を提供した4人のうち、2人は男性であることだ。現在、子ども食堂の運営の中心は、子育てを経験した専業主婦層とイメージされることが多い。確かに、子育てを経験したミドル世代、シニア世代の専業主婦には、地域でのボランティア活動に参加しやすい条件が整っている。時間的にも経済的にも一定の余裕と安定があり、生活のために働く必要はない。子育てを通じて形成した、地域の学校などとの人的ネットワークもある。

しかし、食事、居場所、人間関係などが地域に不足していることを感じ、それらを提供することや、互いに提供し合うことの必要性を感じ、実際にそういう場を設けて運営することが、子育てを経験した専業主婦の「専売特許」であるはずはない。立場の弱い人々の安全が保障される限り、多様な人々が関わることは、それだけで有益なはずだ。

4つの「子ども食堂」のスタイルは様々だ。開催頻度は、不定期かつイベント的であったり、週に4回であったりする。訪れて食事をする人々は、「子ども食堂」という以上、地域の子ども中心とイメージされるが、時には中高年しか来ないこともある。

また中高生など、子どもとはいえ幼少ではない人々を主対象としていることもある。同じように、欠食状態の子どもたちを主対象としていても、オープンで子ども限定ではない「子ども食堂」もあれば、逆にオープンにしないことで子どもたちの安全感・安心感を確保しているところもある。

いずれにしても大切なことは、「誰のため?」「何のため?」という対象と目的が、その時々ではっきり見えていることではないだろうか。今、はっきり見えていないのなら、「いるはずの誰かの気配を感じ、必要としている何かの手がかりをつかむ」ことが“とりあえず”の目的となり得るだろう。

ちなみにCPAOは現在、子どもたちに居場所と食事を提供する「ごはん会」活動を週4回行っているだけでなく、給食のある学校や地域の居場所に行けない子どもたちに食事を届ける活動を、月1回行っている。これらの活動の始まりは、1ヵ月に1回程度の「子ども食堂」だった。各地域で1ヵ月に1回程度しか開催していなかった「子ども食堂」が、欠食状態の子どもたち多数の存在を発見するきっかけとなり、子どもたちのニーズに沿う形で、現在の「食事と居場所」という活動につながっている。

とはいえ、一民間団体の力では、地域のすべての子どもの貧困を解決することは、質・量ともに不可能だ。それどころか、貧困の全貌を把握することも不可能だろう。まだまだ、多様性という面でも人数の面でも、関わる人々の豊かさが、より一層、必要になりそうだ。そのためには、公的資金がどうしても必要ということになるかもしれない。

4つの「子ども食堂」のストーリーには、関わる人々の「豊かさ」を増やす方法のヒントが、数多く含まれている。

「当事者である」「当事者だった」の 生々しさが持つ強み

フェリスモンテの子ども食堂は、19歳の女性の「中高生だったとき、家でも学校でもない第3の居場所が欲しかった」という思いから始まった。フェリスモンテ自体は、親世代の介護を経験した50代の主婦たちの「住み慣れた地域で最期まで暮らしたい」という思い

から始まり、高齢、障害、子育て、地域など多様な問題に関わる活動を続けてきた団体だった。

1999年に活動を開始した実績と、直前に中高生だった女性の思いが結びつき、2015年、「子ども食堂」活動が開始されることとなった。当初、中高生は来ずに中高年ばかりの時期もあったが、徐々に子どもたちの参加者が増え、現在は小中学生も大人も来るようになっているという。

CPAOは2013年5月、大阪で起こった2児置き去り死事件、母子変死事件をきっかけとして、「助けてって言ってもええねんで！」をキャッチフレーズとして活動開始した。2013年5月の2つの事件では、幼い2児を置き去りにして死なせた母親も、幼い我が子とともに変死体で発見された母親も、様々な困難を抱えたシングルマザーだった。

CPAO代表の徳丸ゆき子氏は、育児真っ只中のシングルマザーである。活動の原動力となっているのは、徳丸氏自身のシングルマザーとしての当事者性であり、CPAOに集うシングルマザーたちとの「ピア（仲間）」としての関係性である。

かつて子どもであり、少年であり、青年であったりしたすべての人々に、「子ども時代の自分に、こういう場があったら」「青少年期の自分に、こういう機会があったら」という思いがあるだろう。

また、親としての育児経験があれば、子どもの養育責任の重さも社会のサポートの手薄さも「わがこと」だ。その思いは、努力やガマンや子どもへの愛情が不足しているように見える他の親に対する攻撃につながることも多い。

しかし一歩進めば、問題だらけの子育てを続けざるを得ない状況にある親に対する「あのお父さん自身は、自ら望んで、ああいうダメ親になっているのではないかもしれない」という想像や、「あのお母さんは非難が怖くて他人を近づけないみたいだけど、お天気の話くらいは安心してできるような接近の仕方はないだろうか？」という思慮の基盤にもなるだろう。「子育て」「子どものいる生活」という共通経験があり、それが想像や思慮の基盤になるからだ。

では、「当事者だった」「当事者である」というファクターは、どうしても必要なのだろうか。そんなこともなさそうだ。残る2つの「子ども食堂」を見てみよう。

「よその人」「他人」の距離感も 適切な関わり方や役割のヒントに

「藍朱（らんじゅ）とピンポン食堂」は、地域の子どもが家庭で虐待に遭っていることに津守佳代子氏が気づいたことがきっかけとなり、2016年2月、活動を開始した。とはいえ、地域の大人にできることは多くない。もちろん、深刻な状況にあれば、児童相談所へ通報することはできる。しかし、虐待が認められて児童相談所が子どもを保護すると、子どもは地域からも親からも引き離されてしまう。

もちろん児童相談所の保護は、そのときの子どもの心身と生命を守るために必要な措置であり、現在の日本では唯一の選択肢でもある。しかし、子ども本人、親、地域の関係者の思いを大切にしながら、長期的に幸せな関係を築くためには、必ずしも有益ではない。

津守氏はパネルディスカッションの場で、時折、涙で声をつまらせながら、気がかりな子どもたちの様子を語った。また、親との信頼関係構築の難しさ、行政や学校との連携の難しさ、目的や活動形態に関する迷いやジレンマを率直に語り、参加者たちの大きな共感を集めていた。

「ニュースタート事務局関西」は、不登校、ニート、引きこもりの支援を行う団体として活動を開始した。現在は、引きこもりだった青年たちや、地域生活をする精神障害者の仕事場づくりも行っている。また、その人々が共同生活する施設も運営している。

子ども食堂活動は、CPAOと提携して2013年に開始されたが、現在は不定期でイベント的な活動状況となっている。地域の子どもは参加せず、参加者は“身内”ばかりということもある。活動の場は、共同生活施設の中、公民館、グラウンドに張ったテント、お寺の境内の屋台、公園など様々だ。

活動の背景には、「子どもの貧困の原因は、大人社会の関係の貧しさにある」という思い

がある。また、引きこもりなどの困難を通過し、就労収入による自活も、親となることも難しい人々に対し、社会に対して責任を果たす大人となる回路を開く目的もある。いずれにしても、頻度多く充実した活動を通じて、「地域の子どもの貧困を具体的に解決した」という結果に結びつけるのは難しいかもしれない。

しかしながら、時々の「子ども食堂」活動は、収入や社会的地位や家族の有無と無関係に自分の存在や活動を認め認められ、幸せに毎日を送る大人たちという「モデル」を世の中に、もちろん子どもたちにも提供するだろう。

不登校もニートも引きこもりも、そうならないことが望ましい状態かもしれないし、将来の選択肢や可能性を減らすかもしれない。でも、それで人生が終わるわけでも何でもなく、幸せに生きていけるらしい——。様々なプレッシャーに対して苦しい思いをしている子どもたちにとって、その事実は大きな救いになるだろう。

「子どもの貧困」を超えて 社会の「貧困」解決を

「子どもの貧困」という大きな問題そのものを解決する力は、子ども食堂にはない。そもそも、子どもが貧困状態にあるのは、親が貧困だからである。パネルディスカッションに参加した研究者たちは、この点への目配りを忘れなかった。

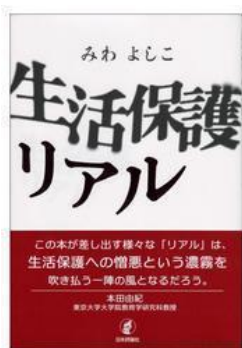
加美嘉史氏（佛教大学・社会福祉学）は、親の所得を引き上げ、親の経済的困窮に対策する必要性を指摘した。「対策」とは、労働環境全般の改善、子どもと家族への公的支出の増加、公的給付利用に対する抵抗感（スティグマ）を解きほぐすことを含む、所得再分配の強化である。

パネルディスカッションで、8人のパネリストが並んでいる様子。マイクを握っているのは池谷航介氏。左端にいる筆者は、このとき、虫に刺された耳をガマンできずに掻いていた

奥野隆一氏（佛教大学・保育学）も、困難や貧困に対する「子ども食堂」のセンサー機能を評価し、さらに磨く必要性を指摘しつつ、公的支援の必要性への指摘を忘れなかった。奥野氏が言う公的支援は、財政、活動の場、活動に携わる人々を支援することなど多岐にわたる。

最後に挨拶した池谷航介氏（大阪教育大学（当時）・障害児教育）は、子どもの育ちに関する専門家として、「大人がどういう形で子どもに手を出せばよいのか」という社会課題の実践と発見の場の1つとして、「子ども食堂」を位置づけた。活動を継続するのは、容易なことではない。しかし、実際に手を出して動けば、社会の課題が見えてくる。

さらに池谷氏は、実際に動いている団体が手をつなぎながら「批判」しあうことの重要性も指摘した。批判の「批」は手偏。手を動かして、責任を持って批判することは、忘れてはならないポイントなのだ。



これから、何をすればよいのか。何ができるのか。必要な資源はどう確保すればよいのか。問題も課題も山積している。だからこそ、飽きずウンザリせず、エネルギーを枯渇させず、燃え尽きず、息長く活動することが必要なのだろう。

そのためには、どうすればよいのだろうか。答えは見当たらない。社会の大人として、取り組み続け考え続けなくてはならない課題であることだけは、はっきりしている。

本連載の著者・みわよしこさんの書籍『生活保護リアル』

（日本評論社）好評発売中

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

